スタッフルーム

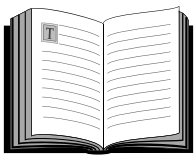
名付け親は，むすめです。

遠藤（えんどう）　泉（いずみ）
（三田メディアセンター）

おかあさん，とおくでしんかんせんのおとがきこえる…

そう言って，眠る毎日だった。娘が生まれてすぐに引っ越した最寄り駅では，東京～大宮間を走る東北新幹線が絶え間なく行きかう。彼女にとっては，夜のまどろみの中で聴く新幹線の遠く走りゆく音が，子守唄のようなものだったのかもしれない。

気が付けば，娘は新幹線が大好きになっていた。私自身がテツ分少なめ…失礼，その世界がまったくわからないため，決してマニアックな知識を身に着けているというわけではない。だが，大宮にある鉄道博物館（通称てっぱく）では「てっぱくらぶ」という会員にまで入会し，時には東京～大宮間という一区間のみ新幹線に乗るという，ちょっぴりバブリーな行き方で足しげくかよったものだ。



その矢先，平成26年度末より金沢まで開通する，新しい北陸新幹線の名称募集の案内が目に留まった。

「新しい景色を走る，新しい新幹線。名付け親は，あなたです。」…ぜひとも名付け親になりたい。

北陸出身の同僚に，何かいいキーワードがないか尋ねたところ，「日本海とかどうですか」。同じく北陸出身の知人からは，「MAXゆきぐに」。…みな，もっと故郷に誇りを持とう！

北陸出身の作家の作品から，何かいい言葉を得られないかと，帰省した折，娘と二人で地元の図書館に行ってみることにした（ここでようやく図書館の登場である）。数年ぶりに足を踏み入れた地元の公共図書館には，本の殺菌機が設置してあり驚いたが，しかしもっと衝撃的だったのは，その殺菌機の名称である。「サッサと殺菌くん」と名付けられたその殺菌機は，紫のあやしい紫外線光を発しながら，利用者がその扉を開くのを今か今かと待ち構えていた。

「サッサと殺菌くん」という存在感ある名前に触発され，いっそ「サッサと金沢くん」という名前を応募してみてはどうだろうかという気持ちにすらなったが，何か味気ない。館内で，「うーん，新幹線もきらきらネームの時代かしらねぇ…うーん，金沢出身の室生犀星って，“ふるさとは遠きにありて思ふもの”って言ってるわりには，年表見ると結構ふるさとに帰ってるんだね…」などとぶつぶつ言いながら調べ物をしていたら，4歳の娘から「おかあさん，ここはみんながごほんをよむところだから，しずかにしてね」と注意された。的確な利用者指導である。

娘は表紙が赤くてかわいいという理由だけで，借りてきた室生犀星の詩集のページをめくって遊んでいた。ひらがなが多い詩を果敢に読もうとするのだが，よりによって「あきらめ」という詩をいたく気に入り，新幹線の名前は「あきらめ」がいいよと提案してくる。新しい新幹線の名前が「あきらめ」とは，ちょっとシュールすぎる。1メートルも進まない車両になりそうである。

応募の締め切りが間近に迫ったころ，改めて娘に，何かいい名前がないか聞いてみた。彼女は少し考えて言った。「いずみこまち，いずみこまちがいいよ」。

彼女の大好きな秋田新幹線の車両「こまち」に，私の名前をくっつけたそうだ。「こまち」という言葉の意味を知らないが故の恐ろしいネーミングである。残念だがさすがに「いずみこまち」を応募する勇気はなく，ほかの名前を応募した。

やがて春が訪れ，夕暮れの日本海を思わせる，オレンジとブルーで彩られた美しい車両が走る姿を見たら，たとえその名前が何であったとしても，きっと私は小さな名付け親がつけてくれた「いずみこまち」という名前を思い浮かべるだろう。そんなことを考えながら，娘と二人で「サッサと殺菌くん」の扉を開けた。